

東亞香料史

山田憲太郎著

昭和十七年五月 東洋堂發行

B 6 判四一〇頁 定價 三圓五十錢

所謂歴史家の歴史以外に、單なる歴史家ではこなし得ない歴史がある。自然科学に關するものがその類である。自然科学に關するものでも、自然科学史といふが如き總説的なもの、天文學史とか數學史とか化學史とか醫學史とかの如くその分科學についてのものもある。亦自然科学に於て扱はれるある資材に就ての歴史を論ずるものもある。

香料史の如きは後者の一例である。又香料は廣義の藥物であるから、藥物史の一部でもある。

單に香料といふと、香粧用の香料位に世間では考へる人もあるが、是は極めて狹義の香料を意味するので、香料は廣義に於ては香味料をも含むものである。

香料の歴史は、香料そのものの歴史としても重要であり、興味あるものであるが、香料は又、人類の一般の歴史にも大きな役割を演じて居るものとして見逃せないものである。

かゝる意味から、香料史は、科學史家に課せられた一つの大きな宿題なのである。歐米の學者によつては、香料史は不満足ながら少なからず書かれて居る。然るに我國に於ては香料史のまとまつたものがないばかりでなく、自然科学史が關心をもた

れだしたのが極く最近であると云つてよい状態である。

此の意味に於て、山田氏の「東亞香料史」は、専門家が素人に先手を打たれた形になるのである。山田氏は、多くの専門家の門はたゞいたではあらうが、生薬學者でも、香料化學者でも史學者でもない、唯香料會社の社員であるといふだけの全くの素人である。従つて、専門家から見れば本書には種々誤りもあり、物足りない點もある。併し又書誌學的にも、生薬學的にも素人である著者が比較的よく古今東西の文獻を漁り、且つ又、引用の出所を明かにして居る點等は、體裁からいふと繁雜かも知れないが、批判するものにとつては甚だ便利で、此の點賞讃の辭を呈して憚らない。

唯、自然科學史的方面が我國に於ては甚だ微々たるものであるとはいへ、香料史の如きはとづくに書かれてゐてもよいのである。何となれば、一般藥物史或は藥學史の如きものになるとなかく素人には近づき難いものであるが、香料は、比較的一般にも親しまれ、範圍も限られ、且つ大衆的興味は一般藥物よりも遙に深いものがある筈であるからである。

それにも拘らず、香料史に就いて現代本邦人の仕事に見るべきものがないのは、實に我々日本人の生活が、香料に關しては甚だ貧弱な爲めではなからうか。日本語の發音等から察すると日本人は明るい性格の國民の様に思はれるが、街を見ると灰色である。餘り派手な飾りは好まず、滋味とか味を貴ぶ。料理等も僅に木の芽の香を喜ぶ位で餘り香味料を用ひず、生臭いものは強ひて香味料で香を消さうとするよりは食べるのを避けると云つた様な有様である。併し我々日本人も、もつと香料に親し

み、日常の生活を更に豊富にしてよいのではなからうか。殊に今や世界の香料の寶庫である大東亞を、我々の發展からさへぎつて居た歐米人の手から自由の天地に開放した今日に於て、此の感を更に深くするものである。

本書は、短い序説に次いで肉桂、乳香、沈香、ジャスミンの四品の香料としての史的考證を試みて居る。

難點を挙げれば、序説をもつと綜論的にしつかり書いてもらひたかつた事、考證が文獻に走り過ぎて實地に粗の傾がある事等である。誤や落のある事は専門家ですらあるものであるから止むを得ない。本邦人の香料への興味を喚び起すには、本書はまだくしいとはいへ、又以て一助たり得ると云つてよいであらう。吳々も批判的の頭腦を以て本書を讀まれる様、江湖に紹介の勞を執るものである。

〔木村康一〕